

〈近代的定位第四回：キーワードと年表〉

(講義10～12)

1. 第四回年表

- 1891 鉋毒事件本格化
- 1894～95 日清戦争
- 1901 田中正造鉋毒事件を明治天皇に直訴
- 1904～05 日露戦争
- 1909 6月～10月 『それから』新聞連載
- 1910～11 大逆事件
- 1911 『現代日本の開化』講演
- 1914 『私の個人主義』講演

2. 漱石の近代批評の流れ

- 『猫』の〈太平の逸民〉(明治インテリ)批判(自己批判)
- 〈大和魂〉批判 = ジンゴイズムの台頭を予感
- 『それから』における近代的エゴと維新的忠孝の対置

3. 大逆事件の衝撃 → 『現代日本の開化』と『私の個人主義』へ

4. 漱石の見た日本近代化 = 開化の問題(『現代日本の開化』)

- ① 速度(引用1)
- ② 外発性

引用1

〈(西洋の開化の) 圧迫によって吾人はやむをえず不自然な発展を余儀なくされるのであるから、今の日本の開化は地道にのそりのそりと歩くのではなくって、ヤッと気合いを懸けてはびよびよいと飛んで行くのである。〉(夏目漱石『現代日本の開化』、27p)

5. ノーマンの見た、日本近代化の〈速度〉の固有性(引用2)

- 内在的要因 = 封建体制の自壊

- 外在的要因 = 外圧 = 西洋列強の植民地化を含意した開国貿易圧力
- 固有の近代化の構造要因 → 下級武士と豪商の連携等（〈円と剣〉の結託）

引用 2

〈速度という時間的要因が日本の社会ならびに政治構造のうえに拭いえない特色をし
 るしているから、明治維新をもたらした環境を検討することが重要である。これによつて
 はじめて……内部的衰退と外的圧力の二つの要因がいかにして近代日本の陣痛期……を
 縮めるような結合の仕方をしたかを見いだすことができる。〉（ハーバート・ノーマン『日
 本における近代国家の成立』第二章〈明治維新の背景〉、32 p f）

6. チューダー朝との比較（ノーマン）

- ブルジョワ期の欠如した近代化 = 絶対主義的専制による近代化（引用 3）
- その根底にはしかし幕藩的集権の人為性 → 社会進化の抑圧 → 等族の
 未成熟、あるいは欠如 → これが明治以降も日本社会の基底部の未・組織性
 へと連続する（本論考の基本的立場）

引用 3

〈日本は経済上の自由放任の段階とそれに呼応する政治的側面——ヴィクトリア朝の
 自由主義とを省略して、一気に封建制度から資本主義へと飛躍した。このように、速度こ
 そは近代日本の政治、社会的形態を決定した要因である。日本は……侵略の危険を受けと
 めるための最新式国防軍の建設、武装兵力の基礎となる工業の開始、工業的近代国家にふ
 さわしい教育制度の形成を同時に成しとげねばならなかったが、その速度ゆえに、これら
 の重要な変革は民主主義的代議制度を通じて人民大衆の手によってではなく、少数の専制
 的官僚によって達成されたのである。〉（同上、79 p）

7. 有司専制（大久保 → 伊藤グループ）を国体論的専制マニアと弁別する必要性

- 維新の担い手は開明官僚へと進化
- 疎外組が修身国体論に偏執 → 専制志向の底流へ ≠ 開明的専制
- 開明的専制とは本来の絶対主義的官僚専制である（合理主義を本質とする）

8. 維新の根本問題 → 農民、農業の疎外 → 日本近代国家の宿痾へ（引用 4）

- 典型としての足尾銅山鉍毒事件の位置（1890頃から）
- しかし国家ぐるみの隠蔽が最後には成功 ⇔ 大逆事件の露呈性

引用 4

〈明治政府の政策は、戦略的産業を創設すること、国防兵力を十分に備えること、かぎられた比較的微力な商業・金融階級に潤沢な補助金を与えて工業部門への進出を奨励することであった。この政策は反面においては、農民階級に課せられた過重な租税負担、国防関係企業にくらべて重要度の少ない企業への切詰め、ならびに、およそ国内的危機を促進し建設事業を妨害阻止するような不安定動因ないしは民主主義的抗議に対する一般的な不寛容をその特色とした（※三島通庸を代表とする土木官僚を示唆している。）（同上、〈結論〉 317 p）

9. 開化の外発性を廻って（漱石）

- 固有の開化の否定ではなく、あくまで発達の落差（引用5）
- 開化的神経衰弱の常態化（漱石自身の体験）（引用6）
- 処方箋は外発の内発化のみ = 主体的近代化の理念（引用7）

引用5

〈西洋の開化は内発的であって、日本の現代の開化は外発的である。ここに内発的といふのは内から自然に出て発展するという意味で丁度花が開くようにおのずから蕾が破れて花卉が外に向かうのをいい、また外発的とは外からおっかぶさった他の力でやむをえず一種の形式を取るのを指したつもりなのです。〉（漱石、同上、26 p）

引用6

〈少し落ちついて考えて見ると、大学の教授を十年間一生懸命にやったら、大抵の者は神経衰弱に罹りがちではないでしょうか。ピンピンしているのは、皆嘘の学者だと申しては語弊があるが、まあどっちかといえば神経衰弱に罹る方が当り前のように思われます。〉（同上、36 p）

引用7

〈外国人に対して、乃公の国には富士山があるというような馬鹿は今日は余りいわないようだが、戦争以後一等国になったんだという高慢な声は随所に聞くようである。なかなか気楽な見方をすれば出来るものだと思います。ではどうしてこの急場を切り抜けるかと質問されても、前申した通り私には名案もない。ただ出来るだけ神経衰弱に罹らない程度において、内発的に変化して行くのが好かろうというような体裁の好いことを言うより外に仕方がない。〉（同上、38 p）

10. 内発的開化の方法としての〈個人主義〉

- 人格主義との融合（引用8）
- 大正ブルジョワジーのエートスモデル造型

引用 8

〈いやしくも倫理的に、ある程度の修養を積んだ人でなければ、個性を発揮する価値もなし、権力を使う価値もなし、また金力を使う価値もないという事になるのです。それをもう一遍いい換えると、この三者を自由に享け自由に楽しむためには、その三つのものの背後にあるべき人格の支配を受ける必要が起こって来るというのです。〉(漱石『私の個人主義』、126 p)

1 1. 漱石の個人主義は近代的公人論でもある

- ミルの〈自由〉ではない → ブルジョワ社会の欠落に規定
- それにより前近代的士大夫性、君子エートスが近代的エゴに流入する
- 国体論的国家主義との対峙(引用 9)
- 時代性の認識 → 国家の安否が問題となる時期はすぎた → 小康期における個人主義の台頭は自然な現象 → 国家の小康期に危機をあおることの不自然(引用 10)
- 国家道徳の低さ、個人道徳の高さ → 帝国主義的弱肉強食の批判含意(引用 11)

引用 9

〈国家は大切かもしれないが、そう朝から晩まで国家国家とってあたかも国家に取り付かれたような真似は到底我々に出来る話ではない。……豆腐屋が豆腐を売ってあるくのは、決して国家のために売って歩くのではない。根本的の主意は自分の衣食の料を得るためである。しかし当人はどうあろうともその結果は社会に必要なものを供するという点において、間接に国家の利益になっているかも知れない。〉(同上、134 p)

引用 10

〈一体国家というものが危くなれば誰だって国家の安否を考えないものは一人もない。国が強く戦争の憂が少なく、そうして他から犯される憂がなければいほど、国家的観念は少なくなって然るべき訳で、その空虚を充たすために個人主義が這入ってくるのは理の当然と申すより外に仕方がないのです。〉(同上、136 p)

引用 11

〈御注意までに申し上げて置きたいのは、国家的道徳というものは個人的道徳と比べると、ずっと段の低いもののように見える事です。元来国と国とは辞令はいくら八釜しくつても、徳義心はそんなにありやしません。詐欺をやる、誤魔化しをやる、ペテンに掛ける、

滅茶苦茶なものであります。……だから国家の平穏な時には、徳義心の高い個人主義にやはり重きを置く方が、私にはどうしても当然のように思われます。) (同上、137p)

1 2. 明治的的定位における在野精神の大きな意味

- 国家の「安否」期における福沢諭吉の在野精神 → 国民理念の造型
- 国家の「小康」期における漱石の在野精神 → 人格主義的の公人論
- 大逆事件以降の「閉塞」に呼応

1 3. 速度と外発性が生む社会的定位の特性 → 定位のポリフォニー化

- 「旧幕」的の日常の並存 (『猫』引用12)

引用12

〈「それに近頃は肺病とか云ふものが出来てのう」「ほんとに此頃のように肺病だのペストだのって新しい病氣許り殖えた日にや油断も隙もなりやしませんので御座いますよ」「旧幕時代に無い者に碌な者はないから御前も気をつけないといかんよ」「さうで御座いますかかねえ」〉 (漱石『吾輩は猫である』60p)

1 4. 定位のポリフォニーと近代的エゴ (代助の場合)

- 嫂梅子のモザイク的の並存 (天保調+明治的の現代) (引用13)

引用13

〈代助は此嫂を好いてゐる。此嫂は、天保調と明治の現代調を、容赦なく継ぎ合わせた様な一種の人物である。わざわざ仏蘭西にゐる義妹に注文して、六づかしい名のつく、頗る高価な織物を取寄せて、それを四五人で裁つて、帯に仕立てて着て見たりする。後で、それは日本から輸出したものだと云ふ事が分つて大笑いになつた。三越陳列所に行つて、それを調べて来たものは代助である。夫から西洋の音楽が好きで、よく代助に誘われて聞に行く。さうかと思ふと易断に非常な興味を有つてゐる。〉 (漱石、『それから』、339p)

1 5. 維新的 (一新二生) の明治的の帰結 (父得の場合)

- 外発的の開化の成功者 (引用14)
- 家父長的の修身の形骸化 → 近代的エゴ (代助) への強要
- 世代差、時代差の顕在化 (引用15)
- 啄木の例 → 明治という時代の苛酷さ (引用16)

引用14

〈代助の父は長井得といつて、御維新のとき、戦争に出た（※戊辰戦争のこと）経験のある位な老人であるが、今でも至極達者に生きてゐる。役人を已めてから、実業界に這入って、何か彼かしてゐるうちに、自然と金が貯つて、此十四五年来は大分の財産家になつた。〉（同上、338）

引用15

〈實際を云ふと親爺の所謂薫育は、此父子の間に纏綿する暖かい情味を次第に冷却せしめた丈である。少なくとも代助はさう思つてゐる。所が親爺の腹のなかでは、それが全く反対に解釈されて仕舞つた。何をしやと血肉の親子である。子が親に対する天賦の情が、子を取扱ふ方法の如何に因つて変る筈がない。教育の為め、少しの無理はしやうとも、其結果は決して骨肉の恩愛に影響を及ぼすものではない。儒教の感化を受けた親爺は、固く斯う信じてゐた。〉（同上、341p）

引用16

〈人間が自分の時代が過ぎてかうまで生き残つてゐるといふことは、決して幸福な事じゃない。殊にも文化の推移の激甚な明治の老人たちの運命は悲惨だ。親も悲惨だが子も悲惨だ。子の感ずることを感じない親と、親の感ずることを可笑がる子と、何方が悲惨だか一寸わからない。〉（啄木、『明治四十三年四月より』四月一日条、177p）

16. 後進資本主義国における定位のポリフォニー化 → 帝政ロシアとの共通点

- ロシアの思想世界の多元性、同時性
- ミハイル・バフチン（1895～1975）の〈ポリフォニー・ロマン〉へ
- 後発的資本主義 → 社会状況のモザイク的並存 → イデーの人格化
- ドストエーフスキイのポリフォニー・ロマンへ（引用17）
- 新聞のモザイク的多声性
- ドストエーフスキイの創作源としての新聞体験（引用18）
- 明治的状况との平行性 → 新聞に関わつた知識人の多さ

引用17

〈ポリフォニー小説は、資本主義期にのみ生まれえた。そればかりではない。ロシアにこそ、この小説に最も適した土壌があつた。資本主義のロシアへの到来はほとんど壊滅的であり、社会的諸世界、諸集団が資本主義の緩慢な到来の過程の中で、その固有の閉鎖性を西洋のように弱めることなく、その多様性をも損なわなかつた。そこでは停滞する社会生活の矛盾の本質が、平静な観照者のモノローグ的意識の枠内からはみだして鋭く露呈し、一方では拮抗する思想から現れ出て、ぶつかりあふ諸世界が、まことに鮮明な個性をそれぞれ主張するのである。そこからまさに、ポリフォニー小説の多元的、多声的な本質の、

客観的な前提条件が形成されていったといえる。) (ミハイル・パフチン『ドストエーフスキイ論』第一章〈ドストエーフスキイのポリフォニー小説と従来の評)、32p)

引用18

〈あなたは何か新聞を取っておられますか？是非お読みなさい。今はそうするより他はありません。時勢に遅れるからというのではなく、公私を問わずあらゆる問題の関連が、目に見えて強く、鋭くなってきているからです。〉 (同上、『ドストエーフスキイ論』中の引用、46p)

17. 帝政ロシアと明治日本の定位共通項としてのポリフォニー性

- 都市化の遅滞 → 農村と都市の定位的並存
- 啄木の両極性 (都市における田園憧憬) の発生
- 国民詩人啄木の抒情の普遍性 (引用19、20、21)

引用19

ふるさとの訛なつかし
停車場の人ごみの中に
それを聴きにゆく

ふるさとを出で来し子等の
あひ
相会ひて
よろこぶにまさるかなしみはなし

ふるさとの山に向ひて
言ふことなし
ふるさとの山はありがたきかな) (石川啄木 『一握の砂』)

18. 都会思慕、田園思慕の対位法 → 明治日本の定位対位法 (引用20)

引用20

〈田園にみても都会を思慕する人の思慕は、より良き生活の存在を信じて、それに達せむとする思慕である。楽天的であり、積極的である。都会に於ける田園思慕者に至ってはさうではない。彼等も嘗て一度は都会の思慕者であつたのである。さうして現在に於ては、彼等の思慕は、より悪き生活に墮ちた者が以前の状態に立ち帰らむとする思慕である。たとひその思慕が達せられたとしても、それが必ずしも真の幸福ではないことを知つての上

での思慕である。それだけたよりない思慕である。絶望的であり、消極的である。またそれだけ悲しみが深いのである。) (石川啄木『田園の思慕』、290p)

19. 定位の二極化 → 基底的心性 (アニミズム心性) の覚醒 (引用21、22)

引用21

〈目になれし山にはあれど
秋来れば
神や住まむとかしこみて見る〉 (啄木、同上)

引用22

〈^{みやびを}風流男は今も昔も
泡雪の
玉手さし捲く夜にし老ゆらし〉 (啄木、同上)

20. 専制的一元性と定位の多元性、ポリフォニー性の結合

- ドストエーフスキイの帝政ロシアと漱石、啄木の明治日本の共通性
- ⇔ 定位多元性を破壊する専制 = 全体主義的専制
- この本質的差異を視界に保つこと

21. 日本近代的定位の多元性 ⇔ 戦後的定位のモノトーン、不活性

- 真の原因はどこにあるのか
- 外発的民主主義を内発化する必要性 → 参照対象としての明治的定位

(第四回キーワード年表終わり)